



立ってくる春／ なぜ物語が必要なのか

学びナビ

文章の種類

文章の種類と読み方

これまで皆さんは、説明や論説、物語や小説、詩歌などさまざまな種類の文章を読んできました。次の文章を読んで、文章の種類について考えてみましょう。

ただ歩く。手に何もたない。急がない。気に入った曲り角がきたら、すっと曲がる。曲り角を曲ると、道のさきの風景がくると変わる。くねくねとつづいてゆく細い道もあれば、おもいがけない下り坂で膝がわらいだすこともある。広い道にでると、空が遠くからゆっくりとこちらにひろがってくる。どの道も、一つ一つの道が、それぞれにちがう。
(長田弘『散歩』)

歩く様子が描かれたこの文章は、詩集に収められた作品の一部です。形式や内容から文章の種類を分けることは難しいですが、文章の種類を意識することで、内容への理解を深めることができます。

例えば、論説は筆者の見方・考え方を、客観的な根拠を示しながら筋道立てて説明する文章です。読者は、筆者がどのような立場から、どのような筋道で、何を訴えているのかを読み取るうとします。

目標

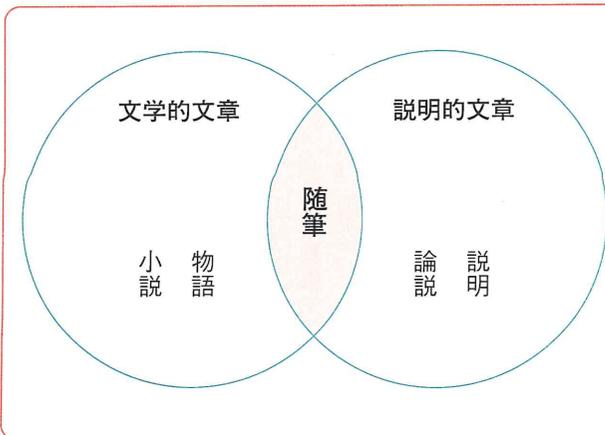
- 文章の種類とその特徴について理解を深める。
- 文章の種類を踏まえて構成や展開の仕方を捉え、内容を評価する。

文章の種類

記号／私

「私」という視点／故郷

随筆は、さまざまな種類の文章の要素を取り入れて描かれている。



10

5

また、小説は作者が人間や社会などを、登場人物やできごとの描写を通じて表現した文章です。読者は、登場人物に共感したり、作中のできごとを疑似体験したりしながら、文章を読み進めます。このように、私たちは文章の種類に合わせた読み方をしているのです。

「随筆」の特徴

次の文章は、随筆という種類の文章です。どのような特徴があるでしょうか。

さくら餅といえば、さくら餅もち。さくら餅に関しては、わたしには長年の懸案があります。さくら餅の、あの葉っぱはどうするのか。
どつやら、世の中は、「葉っぱは食べずにおく派」が大勢らしく、「堂々と葉っぱを食べていたら笑われた」（中略）というような言葉を、もの本や人伝えなどで見聞きます。
でもわたしは、さくら餅の葉っぱは、絶対に食べたいのです！ それで、悩む。
（川上弘美『さくら餅そのほか』）

体験や見聞、感じたり考えたりしたことを自由に書いたように感じさせる文章を随筆といいます。

特定の場面や様子を、会話文などを交えて描く点では文学的文章と似ています。『枕草子』や『徒然草』も随筆です。一方で、実際にあったことに基づく点、独自の見方・考え方を述べる点では説明的文章と似ています。
筆者の見方・考え方を、表現の工夫も味わいながら読んでみましょう。

20 15 10 5



ヒント

- 個人的な体験や見聞に基づいた見方や考え方に着目して、二つの随筆を読んでみよう。
- 構成や展開、描かれ方を意識しながら読んでみよう。

『立ってくる春』

↓ P 23 みちしるべ 2

↓ P 30 みちしるべ 1

『なぜ物語が必要なのか』



立ってくる春

かわかみ ひろみ
川上 弘美

「もう春ですよ、ひろみちゃん。」と祖母に言われ、驚いた。

昭和半ばの東京、二月初旬。一昨日は雪が降った。出したばかりの十一月ごろには重いと思っていた布団ふとんのその重さが嬉うれしく、いつまでも朝は布団から出られなかった。つまさきを、もう暖かくないゆたんぽを包むネルの布に、ぐずぐずとくつつけていた。

ようやく布団から出て、長袖のシャツを着て、ブラウスを着て、セーターを着ても、ちっとも暖かくなならない。木造の家は隙間だらけで、このごろの気密性のある家のように、窓に結露を見ることもない。外と中の温度がさほど変わらないので、結露しないのである。吐く息が白い。顔を洗いながら、外国のお姫さまはきつと毎日お湯で洗顔してるんだらうなあ、などと考える。

私は、日本の小学生で、タイトの膝にはつぎが当たっていて（ひどく貧しいから、というの

10

5

ネル

平織りにして起毛した
柔らかい毛織物。フラン
ネルの略。

ではない、あのころはストッキングだっていちいち伝線がかがっていたものだった)、指先にはしもやけがあつて、宝物は箱根^{はこね}みやげの千代紙貼りの入れ子の箱とタミー人形(着せ替え用の服は高価なので、母が見よう見まねで二着ほど縫^ぬつてくれた)、というごく普通の子どもだった。

「今日から春ですよ。」もう一度、祖母が言った。

「でもまだ冬なのに。」私は口をとがらして答えた。霜柱はつんつん立っていたし、その朝も水道管が凍った。あおあおとしているのはつわぶきの葉とアオキばかりで、楓^{かえて}も樺^{けやき}も柿もすっかり葉を落としてしんとしていた。寒暖計の赤は下の方にわだかまり、ぜんぜん上がってこない。

「でも、暦^{こよみ}の上では、ほら。立春ですよ。」

「りっしゅん。」

「春が立つ、春になるっていうことですよ。」

祖母の部屋には日めくりの暦が下げてあった。暦には、二月四日、木曜、立春、の字が並んでいた。

「春って、立つの。」

「立ちますよ。」そう言つて、祖母は真面目^{まじめ}に頷いた。以来私は、春は立つものだと思ふようになったのである。

立つ春とは、どんなものなのだろう。学校へのみちみち、考えた。

15

10

5

▼縫

ホウ
ぬう

縫合
縫い目

つわぶき

キク科の常緑多年草。

アオキ

ミスキ科の常緑低木。

▼暦

レキ
こよみ

西暦
花暦

人間のかたちをしたものでは、なかるう。空気のようなものか。でも空気は目に見えない。「立つ」と感じるからには、目に見えなくては。本の中にある竜や鬼おにや妖怪ようかいに似た、この世のものではない生き物のかたちをしたものか。それも違う、春はもつと柔らかでのほほんとしてゐるから、火を吐いたり金棒をふるったりするものたちの類いではあるまい。春とは、こまかな生氣あるものに満ちた、盛り上がるようなものだ。それならば。

歩きながら、晴れた冷たい空気の中に見える遠い富士ふじを眺めつつ、私は「立つてくる春」のかたちを、決めた。

立つてくる春とは、さまざま小さい生き物でみっちり埋めつくされた一枚の絵のようなものにちがいない。その春が、地平線の向こうにゆっくり上がってくる。最初のころは端っこだけしか地平線近くに見えていないが、太陽がのぼるように、日々次第しだいに高くのぼってゆく。そして四月ともなれば、すっかり全天を覆うようになるのである。

これだけのことを決め、ようやく私は満足した。よしよし。謎は解けた。なるほど春は立つ

15

10



5

▼ 鬼キ
おに 鬼才

▼ 妖ヨウ
あやしい 妖怪
妖しく光る

ものであろう。まだあんまり見えないけれど、たしかに、今日、ずっと向こうのあの山のあたりに、春が立った。うんうん。

勝手に解かれてしまった「春が立つ」謎は、今にいたるまで、じつは私の中に居つづけてい
る。現在も、立春という言葉を聞くと、反射的に、水平線からゆつくりと立ち上がってくる霧もや
のような絵を思い浮かべるのである。

まだまだ寒い、しかしじきに、春である。

←みちしるべ

1 「もう春ですよ、ひろみちゃん。」(P 20 L 1)、「今日から春ですよ。」(P 21 L 5)と言われた時の「私」の気持ちを読み取ろう。

2 「よしよし。謎は解けた。なるほど春は立つものであろう。」(P 22 L 18)と納得した経緯について整理しよう。

3 「勝手に解かれてしまった『春が立つ』謎は、今にいたるまで、じつは私の中に居つづけている。」(P 23 L 4)について、それはなぜか、考えたことを話し合おう。



川上弘美

「一九五八—」

東京都に生まれた。

小説家。

作品に『蛇を踏む』『神様』『センセイの鞆』『神様2011』などがある。

《出典》『あるようなないような』によった。